



活動を始める一歩を応援「コトハジメ」

新たな盆踊りのムーブメントに参加しよう

「盆踊りの魅力は、年齢、性別、国籍を問わずみんなと一緒に踊れること。どうぞ気軽に輪に入ってください」と呼びかけるのは、仙台七夕盆踊り実行委員会(以下、実行委員会)代表の与野珠美さんです。実行委員会は、2025年から「盆踊りという地域の伝統行事を次の世代に引き継ぐ」をテーマに活動しています。平日夜や休日に集まって踊るほか、毎年8月に開催される「仙台七夕まつり」に合わせて盆踊り大会を企画。伝統曲だけでなく、J-POPやロックで踊る新しい盆踊りを提案しています。

この活動は、祭りを通じた被災地の復興・地域コミュニティ支援を目的に、2012年から行われている盆踊りプロジェクトから新たに生まれたもの。町内会の高齢化やコロナ禍などで地域行事が減少する今、盆踊りを気軽に楽しむことが、地域の伝統行事を引き継ぐことにつながります。練習会や盆踊り大会の情報はホームページから。



▲2025年の「仙台七夕盆踊り」では、のべ1000人が踊りました。

仙台七夕盆踊り2026

日時:8月6日(木)・7日(金)・8日(土) 19:30~21:00予定
 内容:地域の伝統曲とJ-pop、ロック、アニソンで踊る盆踊り(誰でも参加可能)
 会場:仙臺緑彩館 敷地内 入場無料

仙台七夕盆踊り実行委員会

Mail tanabon.sendai@gmail.com HP▶
 TEL 090-7790-6298(与野)
 6月30日まで、クラウドファンディングに挑戦中



活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

若い世代や女性が活躍する自治会・町内会の極意

本書は自治会・町内会の解散が全国で相次ぐ現状に対して、新しい自治会・町内会のあり方を提案しています。横浜市都筑区が令和4年に転入者を対象に行った「地域活動と人とのつながりづくりに関するアンケート調査」の項目のひとつ「どのような運用方法であれば加入や参加したいか」に対しては、若い世代から「役が強制されない」「希望や都合で参加できる」という回答が多く寄せられました。本書ではこの調査を踏まえ、「役」や「加入」にこだわらないことで、若い世代や女性を自治会・町内会の運営に呼び込んだ5つの事例を解説。それぞれの自治会・町内会が課題をどのように克服してきたか、その道筋を知ることができる一冊です。

著者 水津陽子
 発行所 実業之日本社



ぱれっと

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと

特集

アートとデザインの力ですべての人が自分らしく、挑戦できる社会へ

「ぱれっと」には、仙台市市民活動サポートセンター(サポセン)にいろいろな人が集まり、それぞれの色(個性)が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。



長町住民や市内の人など計27人が参加

老舗の和菓子屋店主との交流

オリジナル手拭いをお披露目



市民活動団体を紹介「市民活動突撃レポート!」

まちとの出会いをひらき、地域を盛り上げる

歩いて知る、長町の楽しみ方

太白区長町の魅力に触れるまち歩きツアーが、2026年3月に開催されました。参加者はJR長町駅前に集まり、約1時間半をかけて長町5丁目から3丁目の商店や寺社を巡り、店主との会話や、ガイド役が出す、まちや店にまつわるクイズを楽しみました。最後に訪れたのは、創業76年の銭湯「鶴の湯」です。鶴の湯ではツアーの参加特典として入浴招待券とオリジナル手ぬぐいが手渡されました。手ぬぐいは、商店街の一部店舗で見ると特典が受けられる仕組みになっています。参加者からは、「長く住んでいるのに知らないことばかりだった」「また、あのお店に行ってみよう」といった声寄せられました。

経験から、商店街の人たちや地域おこし協力隊ともつながりがあった渡邊さん。声を掛けると「面白そう」と、協力してくれる人が集まりました。ツアー当日、鶴の湯盛り上げ隊は、参加者がまた鶴の湯へ足を運ぶきっかけになればと、「一度のれんをくぐれば、もう馴染みですよ」と呼びかけました。人とまちをゆるやかにつなぐ取り組みは、始まったばかりです。



鶴の湯盛り上げ隊のメンバーたち

銭湯から広がる、人とまちのつながり

ツアーを企画したのは、市内に暮らす有志5人による「鶴の湯盛り上げ隊」です。代表の渡邊佳恵さんは、大の銭湯好き。鶴の湯にもよく足を運んでいましたが、近隣に住む友人などから「鶴の湯は常連さんの場所というイメージがあり、一人では行きづらい」という声を耳にしました。そこで、「まずは足を踏み入れて魅力を知ってほしい」と、ツアーを企画。周辺の商店についても知ってもらうことで、長町を訪れるきっかけを広げ、まち全体を盛り上げようと考えました。長町にある会社で働いていた

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日 6月10日(水)、24日(水)

開館時間 月曜日～土曜日 9:00-22:00
 日曜日・祝日 9:00-18:00
 休館日 毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌日木曜日) 年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3
 TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042
 [ホームページ] https://sapo-sen.jp
 [サポセンブログ@仙台] https://blog.canpan.info/fukkou/

「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。



ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行

仙台市市民活動サポートセンター(指定管理者:特定非営利活動法人 せんだいみやぎNPOセンター)

発行日 2026年6月1日
 デザイン PEACE Inc.

[X]

@SCSC4CA

[YouTube]

サポセンちゃんねる



鶴の湯盛り上げ隊

Instagram▶



協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」



特集

アートとデザインの力ですべての人が自分らしく、挑戦できる社会へ

障がいのある人の表現と、デザイナーの技術を掛け合わせ制作されたデジタルデータ「仙台ふぉんと」が、約1年にわたる制作期間を経て、2025年4月にリリースされました。株式会社ユーメディア（以下、ユーメディア）と、障害者就労支援事業所アスノバ（以下、アスノバ）の利用者・スタッフが力を合わせた、仙台ふぉんとの魅力をご紹介します。

株式会社ユーメディア

メディアクリエイション部 執行役員	メディアクリエイション部 プランニングチーム 副長	営業推進部 制作ソリューション チーム副長
かどわき さち 門脇 佐知さん	あべ なほ 阿部 奈穂さん	いとう あずさ 伊東 梓さん

仙台・宮城・東北を中心に事業を展開するコミュニケーションデザインカンパニー。印刷を祖業とし、Web・イベント・自社媒体など多様なメディアや手法を通じ、クライアントや地域の課題解決・共創に取り組んでいます。

障害者就労支援事業所 アスノバ
(株式会社未来企画)

管理者
おおごえ ゆうき
大越 裕生さん

2018年、若林区なないろの里の複合施設「アンダランチ」内に開設。介護や保育など多様な福祉サービスを手がける株式会社未来企画が運営する就労継続支援B型の事業所です。



仙台ふぉんとは、2016年に東京都渋谷区で始まったプロジェクト「シブヤフォント」をモデルに、日本各地で展開されている「ご当地フォント」の一つとして誕生しました。障がいのある人が描いた文字やイラストを原画とし、デザイナーがフォントやパターンとして加工・デジタルデータ化する取り組みです。

フォントとパターンは誰でも利用可能で、個人利用の場合は、フォントは無料、パターンは500円でダウンロードできます。商用利用の場合は、別途使用料がかかります。これらの売上げの一部が、原画を描いた障がいのある人の収入になる仕組みです。用途に合わせて色を変えるなどのアレンジが可能のため、活用の幅も、関わる人の輪も広がっていきます。

仙台ふぉんととの制作では、アスノバの利用者が原画を担い、ユーメディアがデザインを担当。アスノバのスタッフが両者の架け橋となりました。これまでに7種のフォントと9種のパターンを制作し、ステッカー、ノートなどの販促物や商品に活用されています。

1 ねらい アートとデザインで広がる選択肢

ユーメディアは、多様な人々が活躍できる社会を目指しています。その実現のため、自社の強みであるデザインを活かそうと着目したのが、ご当地フォントの取り組みです。障がいのある人によるアート活動は広がっている一方で、仕事につながっている事例は、まだ多くありません。門脇さんは「ご当地フォントの仕組みを活かせば、これまで絵を描いたことのない人の可能性も広げられる」と考えました。そこで原画を担うパートナーとして声をかけたのが、アスノバです。

これまでアスノバの利用者は、清掃や軽作業などの業務を中心に行っていました。大越さんは、「自分の個性を仕事の中で発揮する楽しさを利用者感じてほしい」との思いから、取り組みへの参画を決めました。

利用者にとって、アスノバを安心できる居場所だけでなく、社会とつながれる場になりたい



最初は互いに壁がありました、友達のような関係になれました



2 ぼいんと 「共に創る」ことで新たに生まれる表現

ユーメディアにとって、障がいのある人との共同創作は初めての経験でした。互いにどのように関わっていけば良い作品が出来るか手探りの中、大切にしたのは対等な立場で刺激し合える関係づくりです。そのためユーメディアの門脇さん、阿部さん、伊東さんの3人は、まずアスノバに足を運び、利用者の日課であるラジオ体操に参加するなど交流を重ねました。

原画制作では、利用者の発想のきっかけとなるように、仙台らしいモチーフを含む多様なフリーイラストや50音表を事前に用意。利用者はその中から気になる絵や文字を選び、模写することからスタートしました。大越さんは「上手に描こうとせず、自分らしく描いたらいいんだよ」と声をかけ、その人らしい表現を引き出しました。次第に利用者から「これはどう?」と絵を見せる姿も見られるように。こうして生まれた原画をデジタルデータ化した伊東さんは、利用者の文字や絵の特徴を、デザインの魅力として活かしました。

©sendaifont

3 これから 多様な人と社会をつなぐ存在に

©sendaifont

仙台ふぉんととの取り組みは、原画を描く人、フォントやパターンを使う人など関わる人が増えることで、さらに広がっていきます。門脇さんは、「まずはより多くの人に知ってほしい。そして、表現活動をしたい人、社会貢献したい人、それぞれの一步を踏み出すきっかけになれば」と、期待を膨らませます。

※今回の特集ページの紙面デザインには、仙台ふぉんとを取り入れています。

仙台ふぉんと

取り組みの詳細はHPをご覧ください▶